
とある副会長の転生物語 ～ 緋弾のARIA編 ～

ちやるっぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある副会長の転生物語 〈緋弾のARIA編〉

【Nコード】

N5094X

【作者名】

ちやるつぶ

【あらすじ】

『緋弾のARIA』&『主人公だけとある副会長』の二次小説です。メジャーな転生チートものでやりたいと思います。

まず主人公は杉崎鍵をモチーフにしています。

内容は『ハーレム目指してた杉崎鍵が転生先の世界である緋弾のアリアの世界で可愛い女の子達を救っていくが、恋に関しては生前の失敗も有ってか少し控えめな鍵風な少年の物語』です。

あくまでもモチーフにしているだけなので、杉崎鍵と完全一致していませんし、内容もオリジナル設定がありますが、暖かく見守って下さい。

感想や意見を書いていただけると助かります。

更新は月3回を目指してがんばります。

第一話　く転生する副会長く

く鍵く

『……………あれっ……………』

俺は気がつくと光の中にいた。

夢か？　けど夢って自覚できたか？　まさかあの世だったりして！

『そうじゃよ』

まあそんなわけないよな！……………つて…あれ？

なんかじいさんみたいな声を聞こえたような気がした。

『だから…ここはあの世じゃよ　いや、おぬしのいつとるあの世が天国や地獄なら厳密にはまだあの世ではないの…』

声のした方を見るとサンタ……………じゃなくてサンタのコスプレをしているじいさんがいた。

『あのくサンタのコスプレをした天国や地獄何て言っている厨二病のじいさんが何のようですか？』

『わしはそんな危ない奴じゃないわいつ！　全く…そっちの世界では冬だったから着てみただけだというのに……………』

『やばいっ そっち世界とかまた言い始めたよ… 病院に電話しなきゃ！』

(トウルルル… トウルルル… トウルルル… トウルルル
… トウルルル… トウルルル… トウルルル… こちらはN
NTコードです。おかけになつた電話番号は電波の届かない場所に
あるか、電源が入っていないため繋がりません。こちらはNNTPコ
ピツ)

（速くこのじいさんなんとかしなきゃなんねーのに何で繫かないんだ？

『当たり前じゃろ。ここはお主のいた世界じゃないんじやからな』

「心を読まれた!？」

そう言ったじいさんは空間に映像を写した。

(……これ……マジかよ?)

何か俺に似た顔の人がエロゲ専門店から走って出て行って、点滅している信号を渡ろうとして横からきた10トントラックに踏み潰されて死んだぞ…

「始めから大マジじゃよ」

なんかサントのコスプレしてたような気がしたがそんなことはどうでもいい。

『じゃああなたは誰ですか？』

『神様じゃよ』

『本当に？』

『本当じゃ』

『本当の本当に？』

『本当の本当じゃ』

俺はだんだん笑顔になってきた神様？が怖くなったので気になって
いたことを聞いてみた。

『……………ところで俺は天国や地獄でないところにいるんですか
？』

『それはじゃな、わしが恋の神様だからじゃよ』

『恋の神様？』

『そうじゃ。わしは死んだ者が満足に恋をしていなかった時にその
者に再びチャンスを与える役割の神様じゃ』

『普通に満足しなかっただけではだめじゃぞ。おぬしのように俺の
ハーレムを作るとか言っとったくせに結局一人も落とせなかった可
哀相な者、100人以上に告白したが全て振られた者などだけじゃ
よ』

なんか胸が痛い。なんでだろ？

『で、チャンスって何ですか？』

『転生じゃよ』

俺はあの二次創作とかでよくある転生かなと思った。

『あと、おぬしに5つだけ好きな事を叶えさせてやるぞ』

なら元の世界に戻ってみんなを……

『ただし元の世界に戻れぬぞ』

『あと人の記憶や感情をかえるのもな』

……………まあそんなに上手くは行かないよな

ここは開き直るか

『じゃあ「転生先は緋弾のアリアの世界」で「光も目で追える動体視力」と「10キロいないにいる者の気配を感じ取れる空間察知能力」と「戦闘能力においてRランク武偵7人掛かりでも余裕に倒せる緋弾のアリアの世界の中で圧倒的に1番の力」と「転生先の詳細がイ・ウーの戦艦の中」だったのでお願いします。』

何故『緋弾のアリア』の世界かというと、もちろんハーレムのためだ。

とくに理子とジャンヌがタイプなんだよな

あつもちろんアリアや白雪やレキ他多数も俺のハーレムの一員にするけどな。

だからとりあえずブラド倒して理子と、ついでにジャンヌも一緒に
武偵高の入学試験を受ける……っていう計画だ。

『おぬし…すごい欲じやの………本来ならここまでの願いは叶えら
れぬがまあおぬしは過去3000兆年で1番残念な奴じやつたから
特別じゃ　ハアーツ』

なんだ急に頭がボーツとしてきたぞ………

第二話 　　く強すぎる副会長く

く鍵く

（…………あれ……ここはまさかイ・ウーの戦艦の中か？）

今の今まであの変な神様と話していたのに……………なんだかんだ本物だったんだな。

それはともかく理子とジャンヌを速く連れ出さなきゃな！

けどあいつらは何処にいるんだ？

まあここは一本道だから真つすぐ進んでりゃ誰かしらに会えるよな。

『やめろっ！　やめろおおおお！』

しばらくその一本道を歩いていたら叫び声が聞こえてきた。

ここからは前右左と道が別れていたの、声のした右の方に行こうとして見てみたら、すぐ先に体育館並の大きさのドアがあり、そのドアの前で泣きそうな顔をした綺麗な白い髪に透き通るように白い肌をした少女が立っていた。

『ジャンヌ……………？』

ジャンヌは中の様子をしろつと夢中になっていて周りの声が全く聞こえてないみたいなので、肩を軽く叩いたら急にビクンツとなり振

り向いた。

『……！ お前は誰だ？ 見慣れない顔だな？ もしかして新入りか？』

『いいえ違います。 まあそれはいいとして、中で何が起こってるんですか？』

『ブラド……イ・ウーのNO2に理子がやられてるんだ………
……っってお前部外者か？ どうやって入ってきた！』

俺はもう最初の方を聞いただけで物凄い怒りを覚えたので最後の方の言葉は聞いていなかった。

ラノベで読んでいたにも関わらず、実際に近くで理子がそんな事をされていたら自然と湧き出ていた。
俺は理子が好きだからだ。

なんだかんだ良い奴だし、仲間想いで何よりもめちゃくちゃ可愛い。
その理子がそんなことをされていたら怒りが込み上げてくるのは当然だ。

そうして無意識にドアを開けた。

ドアを開けてみたらやはり中は体育館並の広さだった。所々血が滲んでいるので本来は実践形式の訓練とかをやる場所なのだろう。

『てめえは誰だ？ 俺様は今この劣等種の調教中なんだ！ さっさと出ていけ！ それともお前も調教されたいのか』

理子は立ててある十字架に縛り付けられていて意識はまだあるようだが、部外者が急に入ってきて何も言えない程のダメージは受けているようで、

体にはいくらかの鞭で叩かれたような跡が残っていた。

『…いやっ……俺がお前の調教をしてやるよ　かかってこい!』

『はははっ！　お前はバカらしいなだでさて劣等種以上の力のあ
る俺様がいまは最大の力が出せる第三形態だぞ。　まあいい死にた
いようならその願い叶えてやるよ!』

そう言ったブラドは近くに有った鉄柱を持ち俺に向かって振りかざ
した。

俺は道を歩いている最中に偶然カナの部屋を見つけ、部屋にあった
ピースメーカー2つと普通の刀2つを借りてきていた。

(…すげえこれめっちゃスローモーションだぞ)

俺はそのゆっくり迫って来る鉄柱に刀を包丁で優しく撫でるように
入れていく。普通にやっても折れるのは刀だから、相手の振りかざ
してくる角度や力をそのまま利用して、さらに斜めに撫でるように
切った。

すると意外に鉄柱は簡単に切れた。

『まあ劣等種にしちゃあ上出来だ』

『特別だ　お前は一瞬で殺ってやる!』

『こっちの台詞だ!』

鉄柱がきかなかったからかブラドは物を使わず素手で殴ってきた。

だが俺はかわそうとせずに2つあるピースメーカーをポケットから取り出し、その内の1つの弾倉^{マガジン}から弾を3つ抜き取った。

そしてその弾を空中に投げもう1つのピースメーカーで1発だけ撃った。

これまでの作業が0.1秒だ。

すると撃った弾が投げた弾の後ろに掠めた。

それが3回連鎖し、4発同時にブラドの魔臓の位置を的確に貫いた。

『おめえ……何…で俺様…の弱点…を知…ってや…がる』

『それは秘密だ』

というか異世界から来たつつつても信じられないだろーしな。

バタツと床を叩く音を鳴らしブラドは倒れた。

(はぁ… これでひとまず一見落着だな)

じゃあ理子とジャンヌを連れて帰るか……

…理子…

（なにやってんの？）

急に見たことのない男が出て来ていきなりブラドに喧嘩売ってる。

イ・ウーNO2のブラドに勝てるはずなんてないのに…

ブラドが鉄柱を振りかぶった。

終わったなと思った。

あの少年がそこそこできたとしても、さすがにあの力で殴られたら跡形無く潰れるだろうから。

私は普通の死体ならともかくグチヨグチヨになった人間の死体なんて見たくなかったから目をつむった。

その直後ゴオンと鉄柱がなにかに当たる音が聞こえたので目を開けてみると、なんと少年が立っていた。

そしてブラドが少年を殴ろうとして腕を振りかぶると急に倒れた。

自分には何が起こったのか理解出来なかった。

ただ分かるのは、ブラドが少年にやられたこと。

そして体の震えが止まらないことだ。

けれどこれはブラドに対する震えではなかった。

第三話　く脱出する副会長く

く鍵く

よし　じゃあ理子とジャンヌを連れて帰るか。

『さあ　行こう！』

『『？？？？？』』

二人が何言ってるのこいつ……的な目で見てきた。

『あつ俺は杉崎鍵。　理子とジャンヌが好きだ。だから一緒に武偵校に行こう！』

『あんな何言ってるの？』

『第一なぜ私たちなんだ？』

『理由はいくつがあるんだ』

『まず1番の理由。　これが9割くらいかな……………』

二人が真剣な眼差しで見ってくる。

『理子とジャンヌがめっちゃくちゃ可愛いから！』

『まあたしかに理子やジャンヌは可愛いけどそれだけ？』

『残りの1割は……まあいろいろ！だから力を貸してほしい！
ジャンヌダルク30世 峰理子・リユパン4世』

正確には可愛いから。そして守りたいからだけど……まっそんなこと
どつでも良いか。

『『何で知ってるの！？』』

『まあ勘つていう事で！』

『まあいいやあ それで私達に何のメリットがあるの？』

『まず…はいっ！』

俺はそういつてペンダントを差し出した。

『なんで！？』

『いやあ始め見たとき理子の首になかったから、さっき戦つてると
きずつと探してたんだ。 おかげで倒すの長引いたけどな。』

『はいそれは終わり！ で、もう一つは君たちを絶対に幸せにする。
』

『なにがあつても守り抜く……絶対に』

『うん。じゃあいーよ お前……鍵にはいろいろしてもらったし』

『私もだ。 理子が行くなら付いていくとしよう。』

喜んだのもつかの間、場の空気が一気に重くなった。

『……シャーロック・ホームズか』

初代シャーロック・ホームズ……格闘技、銃技においては右に出る者はいないというレベルの技量を持ち、それ故に武偵の原点とも言える人物だ。

『やあ…確か杉崎鍵君だったかな？』

物凄い笑顔で聞いてきた。気のせいかなその笑顔の奥には何か違うものを感じた。

『ええ。何かご用でしょうか』

急に出て来たシャーロックは口を開き、唐突に言った。

『イ・ウーに入って貰えないかい？』

『断ります』

シャーロックの言葉が放たれてから間もなく俺は答えた。

『どうしてだい？』

『俺はやらなくちゃいけない事があるんです』

『ほう』

シャーロックが生き生きとした眼差しで俺の次の言葉を待っている。

『あなたと同じです。あなたが守りたい人、ここにいる理子・ジヤンヌの他にも守らなくちゃいけない人がいるんですよ』

『でも僕は君の力が欲しい。君が再び断るのなら無理矢理にでも奪ってしまいそうだ。』

『断ります。だから相手なら引き受けますよ。』

またも即座に断った。そしてシャーロックは明らかな作り笑いをして…

『冗談だよ。僕じゃ君には到底敵わない。僕でさえブラドをやるのには結構手間取ったのに、君は一瞬だったのが証拠だよ。』

『では失礼するよ。』

シャーロックが去り際にそう言い残し去った。

『『ハアーツ』』

緊張から抜け出した拍子に三人同時に安堵の息をついた。

『緊張した〜 てか俺よくあんなこと言えたな。今思うとヒヤヒヤするな』

『理子もヒヤヒヤしたよまさか教授の誘いを一刀両断するんだもん』
プロフェシオン

『本当だな。鍵の方が強いはずなのにあの緊張感……さすがだ…』

『えっ！ 俺が？ そんなわけないじゃん！ 俺なんかシャーロック』

クには絶対敵わないよ…』

『なに言ってるの？ 教授も言ってたでしょ。鍵はあのブレードを瞬で倒す程の力があるんだよ！』

『いやシャーロックとブラドとは絶対に別格だ。俺の100倍は強いんじゃないか？』

いや100倍どころではないかもしれない。だって緋弾を持っているってことはアリアが使ったあのビーム使えるということになる。流石にあれを至近距離でやられたら避けきる自信がない。

『いや鍵の方が強いぞ。絶対…』

『んなわけないだろ！ ははっ』

（もういいや）

理子とジャンヌが心底呆れたような顔をしているが気にしないことにする。

『じゃあ行こうか。荷物の準備とかもあるだろうから15分後にまたここで。俺も用事があるから。』

カナから借りたピースメーカーと刀を返さなきゃな。

俺は去って行く二人を見送った後カナの部屋に行くとカナがいた。

『あなた何で私の部屋にいるの？』

少し怒ったような表情をしているが可愛い。とにかく可愛すぎる。

『これ借りてたんで。返しに来ました。すみません勝手に持ち出してしまつて。』

『じゃああなたが……』

『何ですか？』

『さっき教授に言われたのよ。私の武器を勝手に借りた人になんか武器をあげてくれつて。あと潜水艦も用意しろつてね。』

シャーロック良い奴だ。見直した。てかここからの脱出方法なんて考えてなかったから本当に助かった。

『はい！ これ』

そう言つてカナは俺に銃を二丁渡して来た。

M1911……たしか米軍が使つてる一般的なやつだな確か入れられるのは7発だ。

その場凌ぎにどうぞつて感じだな。

まあありがたいことには変わらないが。

『潜水艦は最上階のフロアに用意しといたからすぐに出発できるはずよ』

『ありがとう』

『理子やジャンヌに挨拶しないでいいのか？ 大体の話は聞いてんだろ？』

カナは理子とジャンヌの上司だったからな。

『いいわよ。 但し絶対にあの子達は守りなさいよ』

『もちろん』

そう言い残して俺は待ち合わせ場所に向かった。

『鍵遅いつ！ プンプンガオーだぞっ！』

『ごめんな。 ちょっと用事が長引いたんだ。』

『じゃあ行くか！』

部屋から出て最上階のフロア——潜水艦のある場所に向かった。

『これがイ・ウーの潜水艦か… 凄いな。 てか理子とジャンヌはよくこんな複雑な機械を操縦できるな』

『意外に簡単なんだよこれが。 鍵にでもきつと出来るよ』

『そうかなあ』

何故か理子が唐突に何か閃いた様な顔をした。

『鍵…キー……キー！？……………キー君だ！』

『これから鍵はキー君ね！』

よくわからないあだ名をつけられ、これから俺の第二の人生が始まるのだった。

第四話 　　到着した副会長

　　鍵

『ふっ　ギリギリ間に合った』

『マジのギリギリセーフなんて始めて体験したよ!』

『そうだぞ!　あと1分遅れてたら…』

――遡ること30分前――

『やっと着いたな!』

イ・ウーから脱出してから、1ヶ月も旅をしていた。

もとは1週間位で東京武偵校に着く予定だった。

しかし大丈夫大丈夫と言っていた理子が、潜水艦に搭載されていた地図の上が南だと勘違いしていたらしく、進行方向とは逆の南に進んでしまい南極にたどり着いたのだ。

今思うと何で南極に着くまで気がつかなかったんだろうな？

そして、そこからジャンヌが運転を代わりイ・ウーを出てから1ヶ月後にやっとのことで東京武偵校のある人工浮島^{メガフロート}に着いた。

着いた直後、なんだかんだ腹が減っていたので昼飯を食べるために俺達はマックに入った。

『まったく、理子のせいだぞ！』

そう言ったジャンヌに対し理子はほっぺをプクッと膨らませた。

『私は悪くないもんっ！』

『まあ理子のせいだろうな』

実際は俺とジャンヌは何かがおかしい事に気がついたので、さりげなく理子に『なんかそっちじゃないような気がするな』『私も何となく。何となくだがそんな気がするぞ』と繰り返したんだが理子は決まって

『大丈夫大丈夫理子りんにまかせなさいって！』と言ってきかなかったのだ。

『でも気がついたなら教えてくれたっていいじゃん！』

『さりげなく何度も言ったぞ』

『なんでさりげなくなの！ はっきり言ってくれたって良いじゃん！』

『だってなあ〜ジャンヌ』

『まあそうだな』

理子は物凄くプライドが高いのではつきり『間違ってる』なんて言ったら素直に聞くわけがない。

だからさりげなくだったらなんとかなると思ったというのが俺とジヤンヌの共通意見だったのだ。

『だってって何！？』

『まあいろいろとだ』

『まあいろいろだな』

『何！？ 余計気になんじゃん！』

なんて話していると、すぐ後ろのテーブルに座っている学生と思われる少年達の話がうつすらと聞こえた。

『マジ危なかったよな』

『それはお前のせいだろ！』

『ホント まさか願書提出期限が今日だったなんて……』

今なんて言った！？

願書の提出期限が今日？

もちろんのこと、この人工浮島で学校と呼べるようなのは東京武偵

校のみである。

ということは……

『すみません！ 願書つてもしかして東京武偵校のだったりしますか！？』

俺は即座に席を立ち、後ろのテーブルに行き質問をした。

『あ……はい……』

1番手前の席に座っていた少年が返事をした。

『それって何時までですか！？』

『1時までですよ』

『……！！！！』

今の時刻は12時40分。

『理子、ジャンヌ 行くぞ！』

俺達はすぐさまに席を立ち、レジにいた店員に伝票と金を置いて店を出た。

『ちよっ……お客様！？』

『………つりはいらない』

ふうー一度言ってみたかったんだよな。

まあこの金はさっき理子に借りただけだな…

『お金が足りないのですが』

理子には確かにお札を一枚貰ったんだが…。

振り返りレジを見てみるとそこにはなんと100円札があった。

『アハハ……すみません。急いでいたもので。』

後ろを振り向くと、理子が腹を押さえて笑っていて、ジャンヌは心底呆れたような顔をしていた。

（…理子のやつ！ けどまあ可愛いから許す！）
でも会計どうしようか？

そんなことを考えているとジャンヌは俺の隣に歩いてきた。

『ではここに置いておく』

『じゃあ急ぐぞ』

やべえジャンヌカッコイイ……

（つて、そんな場合じゃなかったんだ！）

そして俺達は武偵校に行き、願書を提出してきたのだった。

『で今に至るわけだが…』

『やっぱりイロイロ理子のせいだな…』

南極事件、伝説の100円札事件。

この2つの残虐かつ悲惨な事件の犯人は理子なのだから。

1つ目の事件ではやる気、希望、その他諸々を喪失し、2つ目の事件は『お金が足りないのですが』と言ったときの店員さんの営業スマイルを見て俺の精神はもう崩壊寸前だった。

『間に合ったから良いじゃん！　ねっ…ねっ！』

理子がウインクをして謝ってきた。特上の笑顔で…

（これは反則だろ…）

『…まっ良いか。うん間に合ったんだからオーケー』

『じゃあ行くぞ』

ジャンヌはただたんにこれ以上長引くのが面倒だったらしく、話を切り上げた。

行くつつてもこれから何か予定有ったっけ？

『って何処に行くんだ？』

『ホテルだが？』

『！？』

ホテルって何考えているんだ？

まさか理子とジャンヌが俺を……

やばい。顔のにやけが止まらない。

『大丈夫！ キー君が考えているようなことは無いから』

『じゃあ何で？』

『今日泊まる場所ないでしょ！』

つまり入学試験をやって無いから寮にも泊まれないので泊まる場所が無いということだ。

『そうか！明日は入学試験だしさっさと行くか！』

その後ホテルに着いた俺達は疲れが溜まっていたからであろうが、ベッドに入ってすぐ眠りに落ちた。

第五話　く試験前日の副会長く

『キー君どしたの？』

理子が珍しく心配してくれたようで、病人を見るような目で見てきた。

『鍵………』

理子の隣にいるジャンヌは何度も瞬きをして立ち尽くしている。

『んくどうかしたか？』

（寝癖そんなに酷いのか！？　触った感じ全然立っていないんだが……）

『………』

二人は黙って目の下を指さした。

俺には意味が分からず、しばらく考え込んでいると理子が口を開いた。

『キー君。洗面所に行ってみて』

（なんだ。　やっぱ寝癖か……）

寝癖を直すべく俺は整髪剤のある洗面所に向かった。

洗面所に着き、鏡を見てみると、げっそりとした顔で酷いクマのおじいさんがいた。

『わっ！！！』

誰だこれ？

『……………』

考えること1分。

『俺か！』

『それで、キー君はどうしてそんな顔をしているの？』

どうやら理子達は俺が鏡に写った人物が誰か考えているうちに、洗面所に来ていたようだった。

『あゝ緊張しててさ。だってせっかく理子達を連れ出して武偵校に来たのに肝心の俺が落ちたら元もこもないだろ？』

聞いてみたところ今年の東京武偵校の強襲科受験者は最後に願書を提出した俺を含めて400人そのうち合格者は50人なので倍率は8倍…つまり8人に1人しか受からないのだ。

それに遠山キンジもいるしな……もし戦う事になったら……

（考えただけで鳥肌が立ったぞ）

何たってキンジはシャーロックに勝ったんだから。

『いやっ鍵に勝てるやつなんていな…』

ジャンヌが何かを言いかけていたが、理子がジャンヌの肩に手を置き、首を横に振って遮った。

（なんか見たことあるぞ、ドラマとかで医者が『残念ですが……○君はもう……』と両親に子供の死を宣告するやつにとっても似ている……というか同じだ。）

『何？ 俺がなんだって？』

『なんでもないよ！ けどキー君はちょこつと自信持った方がいいかな』

『わかった！ サンキュー』

理子はやっぱり優しいな。

メンタル的に俺を気遣ってくれるなんて……

『試験の開始時間って何時だったっけ？』

『9時開始だ』

ジャンヌが直ぐさま答えてくれた。

『『『………』』』

だが俺達はあることに気がついてしまった。

今の時刻は8時45分……

なんか前にもこんなことがあったような気がするな。

『理子！ ジャンヌ！ 行くぞ！』

俺達は玄関の扉を勢い良く開き試験会場へ向かった。

――15分後――

『ギリギリセーフ！』

俺達は又しても1分前に到着した。

『ハアハア…ハア………危なかったね………』

理子とジャンヌは久々の全力疾走で疲れたようだ。

（これから試験なのに大丈夫か？）

なんて考えていると、昇降口にあるスピーカーからアナウンスが聞こえてきた。

『えゝ 各学科の試験場所について説明します。 強襲科は校舎西側の戦闘訓練用ビル付近……………SSRはSSR学生塔へ各自集合するよーに。』

このダラダラしている女性の声からして声の主はおそらく蘭貌だろう。

『じゃあ行くか』

因みに受けた学科は俺と理子が強襲科、ジャンヌがSSRなので、ここからは別行動になる。

『じゃあ私はこっちだな』

『頑張れよ!』

『まあジャンヌなら余裕っしょ!』

『善処する。理子も頑張れよ。』

『まあパアッパラパーンと終わらせるよ!』

(俺への『頑張れ!』は!?)

俺の期待も虚しく、話はそこで途絶え、ジャンヌは歩きだしてしまった。

— 強襲科試験会場 —

『で……………何これ?』

理子がぼっさりと呟いた。

（確かにこれはな……）

辺りには、人人人人人人人人人人人人人人
人人人。

人しかない。

今年の強襲科の受験者は400人を超えるらしいから多いとは思っていたが400人っていうのがここまで多いなんて…

「まあ頑張ろうぜ！」

「ラジャー！」

理子は姿勢を正しくし、手をおでこの前に固定しそう言い放った。

（ああやっぱり理子は可愛いなあ……癒されるうー）

「ああやっぱり理子は可愛いなあ……癒されるうー」

あれなんか口が開いてた気が……

理子を見てみると顔を真っ赤にしてボウと立ち尽くしてる。

「体調が悪いのか？」

「キー君って天然ジゴロ？」

（ジゴロ？ 何だそれ……）

『ジゴロだかなんだか知らんが行くぞ。』

『じゃあ次… 101番から200番のやつ集合』

俺は200番なので声のした方に行った。

因みに理子は俺の次の201番なので、一旦お別れだ。

『じゃあ理子、行ってくる』

『行つてら〜』

そして俺は一步踏み出した。

第六話　く試験する副会長く

..... 195番『はい!』 196番『あ...はい』 197番『はい』
198番『はいっ!』 199番『はい』 200番

『はいっ!』

『よし全員いるな。それではルールを説明するぞ.....』

.....。』

他にもいくつか有ったが、言われた主なルールはこうだ。

・試験会場はこのビル一棟のみで、ここからでたものは即失格とする。

・この試験の審査基準は試験時間の30分間で、戦闘不能にした人数や技能を元に決められる。

・武偵中から来た者と一般中から来た者の不公平を無くし、かつ危険を回避するため、銃・ナイフなど武器の使用を一切禁ずる。

・その他の基本のルールは武偵法に基づいているので、人を殺すことは禁ずる。また、その他の武偵法についても同様に守ること。

(武器とナイフの使用禁止か...きついな。けどまあ頑張るか!)

『では中に入りこの紙に印された場所で待機し、私が合図したら初

める。』

そういつてこのビルの地図を渡された。

地図を見てみると、俺は4階の中央からスタートだった。

このビルは8階建てなので、4階の中央といったら丁度ど真ん中だ。

俺は地図を見ながら地図に印された場所へ移動した。

（ここからスタートか……）

辺りには均等間隔にある柱………しかない。

この階には他に10人位いるはずだが、幸か不幸か柱が太く誰も見えない。

（せめて位置が分かれば良いんだが。）

あれっなんかいろいろ忘れているような………

（ウッ）

やばい。

トイレ行きたくなった。

(アッ……………)

何か忘れてると思ったら、大事なルールを忘れてた。

『・1人以外全ての人が戦闘不能になった場合や緊急事態を除き試験は30分経つまで行われ、ビルに入ったあとは試験終了まで外に出ることは出来ない。』

(どうしよう……………)

俺がトイレに行くためには、ここにいる奴ら全員を倒さなくちゃいけないのか…………

たとえば俺にRランク武偵7人を倒せる力があつたとしても使いこなせる力量が無ければただの宝の持ち腐れ。

ブラドのときは体が勝手に動いてくれたので良かったが、下手したらそこのチンピラに負けるかもしれない。

俺は少しは練習しとけば良かったと後悔した。

そんなことより大切なのは、今どうするかだ。

まあ今出来る最良で頑張るしかないのだが。

問題は他の奴らが何処にいるかが分からないことだな。

そんなことを考えていると、あることを思い出した。

(んっ？ たしか俺って空間察知能力を神様に頼んだような気が……………)

というか空間察知能力のこともっと速く思い出してたら……

でもどう使うんだ？

まあ何となくやってみるか。

俺は目をつぶり、気配を探っていたらなんか辺りにもやもやみたいなのを感じられた。

（このもやもやみたいなのが人かな？）

『パァーン！』

引き続き気配を探っていると急に発砲音が聞こえた。

ビルの外から音がしたことを考えると、これが試験開始の合図なのだと思う。

（このビルにいる人全員の位置はわかったから、速攻で終わらせるか！）

俺のお腹が持たないからな！

俺はまず1番近くのもやもやへ向かった。

すると案の定受験生と思われる少年が1人いた。

『グフッ！』

少年に気付かれる前に懷に潜り込み、鳩尾に的確に一撃をいれる。

すると少年は静かにその場に倒れ込んだ。

『…サッ……』

今度はすぐ背後に人の気配を感じた。

（さっきから近くにいた奴か。）

俺は背を背後に向けたまま、徐々に近づいていた少年がすぐそばに来るのを待った。

その直後少年が俺の首を目掛けて拳を振り下ろした。

俺はそれを空間察知能力を応用することで感じ取り、少しも振り向かず避けた。

（空間察知能力ってすごいな！ 目で見るよりか数倍も周りの情報がわかるぞ！）

避けられるなどと微塵も考えていなかった少年は思いつ切り殴りかった勢いに体がふらついた。

俺はふらついた僅かな時間で少年の足を掃い、こちらに倒れてきた少年の鳩尾に当たるよう拳を構える。

すると少年は自分から拳に向かって倒れて来るので、見事拳が鳩尾にめり込み、少年は意識を失った。

(…はあ…………マジかよ……………)

2人を倒したのも束の間、周りにいた他の8人が俺を囲っていた。

この試験ではルールを守れば何をしても良いので、結託することも反則にはならない。

おそらく今までの闘いを観ていた奴らが1番厄介そうな俺を始めに片付けようとしたのだ。

(まあ…………俺もあと5分位が限界だからな)

俺は全力で一步を踏み出し、まず目の前にいた二人の鳩尾を両腕を使って倒した。

少年達が少年が倒されたのに気が付く前に他の奴らの背後に回り込んでいき、手刀で首の骨を的確に叩くことによって気道を一瞬止め意識を失わせた。

『…………バタバタバタバタバタバタバタ』

意識を失った少年達は立っていることが出来なくなり、次々と床に倒れ込んでいく。

この間僅か3秒

(やつばっいいい！急に動いたせいで、膀胱がピ

ンチ)

速く試験を終わらせるためにも俺は急いで他の受験者の位置を探りはじめた。

しかし……

最初は100人いた受験者が開始1分もしないうちに50人を切っていた。

（要するに圧倒的に強い奴が最低一人はいるわけか……）

俺まだ比較的に人の多い5、6、7、8階へ向かった。

人が多いということはその強い奴は下の階にいるということだからな。

5、6、7階では同じ様に速攻でやってたのだが、踏ん張り過ぎたせいか俺の膀胱はあと2分が限界のようだ。

8階についてみるとたった3人だけが残っていた。

（あんまり踏ん張り過ぎると……漏らすな……）

すると急に内の一人が俺の方に向かってきた。

足音をたてないように癖の付いた走り方、いつ反撃がきてもいいように対処できる手の構え、そして坦々にただ敵を倒そうとする眼差し。

（慣れている……プロか！）

原作では、たしかプロ武偵が数人試験に紛れ込ませていたはず。

慣れてすぎている動きからしてまず間違いないだろう。

（ということは、ふざけてはいられないってことか。）

丁度俺の真ん前に来た時、俺は相手の技量を知るために一割程度の力で腹を殴った。

しかし拳は腹に届かず、右腕で止められていた。

どうやら右腕は使えなくなったようで、一旦体勢を立て直すために後ろに下がった。

一割程度でギリギリ反応していたところを見ると、こいつはそこまで強くないようだと思った。

今度は俺から５メートル先にいるそいつに近づき脇腹を三割にも満たない力で蹴った。

『ゴフツ…ドスッ』

すると今度は耐え切れなかった様で、５メートル近く吹き飛び、意識を落とした。

『『……………』』

これを見ていた残りのプロ武偵は平然としているが、内心動揺しているようだった。

俺の膀胱はそんなことを気にしている暇が無いため、残りの奴らを倒すことを優先した。『『……………ゴキボキボキボキ……………』』

時間に余裕がないため、俺は五割位の力で相手達の胸を殴った。

一応心臓を考慮して、二人とも右胸の下辺りを狙った。

すると、俺ののスピードに一切反応出来ず、そのまま拳は右胸に吸い込まれ、骨も全力の力に耐えられなかった様で、当たった場所から次々と砕かれた。

（やつべー やり過ぎた…けどまあプロ武偵ならこんくらいは大丈夫だよな！）

そんなことを言いつつも、やはり二人の容態が気になったので俺は近づき、まず脈を確認した。すると脈はあったようでドクンドクンと脈をうっている。

折れた骨も、肺などには刺さっていないなく意識を失っているだけの様だ。

（よし、大丈夫っと）

二人の無事と自分が試験失格になっていなかったことを確認した俺は、他にこのビルに残っている受験者の気配を探った。

1階……なし、2階……なし、3階………1人。

この思考に時間がかかっているかのように感じた人もいるだろうが、実際にかかった時間は1秒にも満たない。

それはともかく俺は3階にいる残り1人の受験者のもとに向かった。

因みにこの時点で、試験開始から3分15秒——膀胱の限界まで1

分45秒だ。

俺は3階に着き、目の前にいた少年に言葉を放った。

『あんたが最……』

しかし言葉を放ち切る前に、少年は俺の真ん前にまで来て顔面に拳を振り上げてきた。

俺はそれを一步後ろに下がり冷静にかわす。

（つぶねー！ 急に来るとは思わなかったから油断してた…）

正直スローモーションで見えるのだが、当たった時の衝撃は同じなので、あのレベルのアップパーを喰らってたらまずかった。

先程の武偵以上の身のこなしからして恐らくSランクであるだろう。

（膀胱もあと1分半位はもつっぱいから少し練習するか。）

こんな相手と練習する機会なんて滅多に無いだろうからな。

その直後少年は一瞬で俺の左手を掴もうとし、体を半回転させ、背中を向けてきた。

（一本背負いか……なら…）

俺は捕まれる前に立ち、少年の右手を掴み、関節をうまく利用して

その場で一回転させる。

怪我をさせないようにそつとだ。

少年は倒れても尚すぐさま立ち上がり今度は顔面を殴ろうとしてきた。

（フェイクだな）

よく見ると少年の足が俺の脇腹に向かって来ていた。

しかし少年の足は俺の手にいとも簡単に捕まえられた。

俺は掴むと同時に足を掃った。

すると片足をあげていてバランスの取れていなかった少年はフワッと宙に浮き、地面に倒れ込んだ。

その後も少年が攻撃を仕掛け、俺は赤子の手をひねるようにあしらっていくという試行が何度も繰り返された。

そして1分と少し経過した。

『タイムアウトだ！』

始めて自分から攻撃をした俺は、8階での失敗を元に今度は一瞬で少年の懐に潜り込み、一割程度のパンチを毎秒100回のペースで繰り返した。

（あつ別に毎秒100回が限界じゃないぞ！）

すると少年は防ぐことの出来た一割以外全てを喰らい、意識を完全

に失った。

『ダンッ!』

俺は全力で1階の入口へ向かい、入口の扉を勢い良く開き、急いでトイレへ向かった。

途中で蘭貌の声が聞こえたような気がしたがそんな場合ではない。

『ボタン……シャ――』

『

ギリギリでトイレに滑り込んだ俺は、物凄い勢いのおしっこをだしてトイレを後にした。

第七話　く試験後の副会長く（前書き）

最近寝不足で頭がガンガンするな

そんなどうでもいいことは放っておいて、第七話どつぞ

第七話　　試験後の副会長

トイレから戻って来ると、試験会場のビルの前で鬼のような形相で待ち構えている蘭藐がいた。

『おい　　すゝぎゝさゝきゝくゝん』

『何ですか！？』

怒られる心当たりが全く無い俺は、これから言われる言葉に不安を感じつつも言葉を返す。

『重傷者4名、内2名は肋骨を折り、いまだ意識不明だそうだ。』

『えっ！』

『お前……』

『まさか失格なんですか！？』

プロ武偵ならあれくらい大丈夫かと思っていたのに……

こうしている間にも蘭藐の顔が段々と不気味に笑ってきている事は気のせいだと信じよう。

俺の不安とは裏腹に、蘭藐は意外な一言を放つ。

『……面白いな。』

『へっ?』

『だから面白いなお前。心配せんと失格になんかしない。お前がいたら盛り上がりそうだから……だからこれからは強襲科で存分に殺し合え!』

(ん?……殺し合い? 俺は別にそんなことしたくないんだが)

よくよく思い出してみると蘭藐って戦闘狂だったっけ。

『あいつの殺し合い速く見てーな』

とんでもない事を楽しそうに呟いている事はさておき、失格を免れたことには蘭藐に感謝だな。

理子とジャンヌと待ち合わせるためにメールを送り、待ち合わせ場所である校門へ向かった。

30分ほど待っていると、理子とジャンヌがやってきた。

『キー君!』

『鍵!』

再開するやいなや二人が急に怒鳴ってくる。

もちろん俺には怒られるような覚えがないが、今までにないくらい

怒っていたので、慎重に聞く。

『ドーナサツタンデスカ?』

あまりの迫力に声が裏返ってしまった。

『メールだよ!』

『メールだ!』

このあとしばらく説明を聞いてみた所、俺がメールしたタイミングは丁度試験中だったらしく、身を潜めていた二人は一発で居場所がばれた……ということらしい。

『……………すみマセンシタアツ!』

俺はこれでもかというほど頭を下げて誠心誠意謝罪し、一所懸命に弁明する。

『けどまあキー君だしね……』

『ああ鍵だしな……』

何か変に納得をされているが、解決したなら良いか。

『ありがとうございます!』

『で、鍵はどうだったんだ?』

『えっと……普通だった?』

少し不安要素もあるが、試験失格にならなかったし、特に異常もなかった……様な気がする。

『こつちが聞かれても……な』

ジャンヌは困った様な顔をして首を傾げる。

『因みに理子は30分間頑張って生き延びました！』

『理子…手加減しただろ。』

理子はヒス金とアリア二人掛かりでやつと倒せた相手だ。

仮に理子が^{ステルス}能力を使っていなくても、Aランク程度の力はあるはずだからな。

『そんなのしてないよ。とゆうか……』

『何だ？』

俺が先の言葉が気になり問い掛けると理子は続けて言葉を紡いだ。

『3人以外は楽勝だったんだけどね……』

つまり3人はとてつもなく強かったということだろう。

『3人はどうしたんだ？』

理子がプロ武偵に対してどのように対処したのか気になったので聞

いてみた。

『逃げて隠れて携帯鳴って逃げて隠れた』

プロ武偵から隠れている最中に携帯鳴ったのか……

『すみませんでしたっ！』

俺は再び誠心誠意謝罪した。

その現場を回想した理子から放たれる不穏な空気を振り払うためにジャンヌに話を振ってみる。

『ジャ…ジャンヌはどうだったんだ？』

『私も普通だぞ』

ジャンヌの普通ってどんぐらいなんだろう？

『ただ私に武器を向けた奴らは全員叩きのめしただけだ』

SSRは能力ステルスを持った武偵のみが入ることの出来る学科だ。

SSRを受ける奴らは大概、伝統的な家などから来る既に能力を使えるエリート位だから武器の使用はOKというわけか。

『じゃあまあ余裕だったわけか』

『まあな！』

ジャンヌは胸を張って言い切った。

『キー君！』

理子がいつの間にか復活したようで、俺の後ろに立っている。

『なんか間で話がズレちゃって聞けなかったけど、キー君は結局どうだったの？』

『確かに。さっきは普通と言っていたが…』

『敵を全員5分で倒した』

二人とも一瞬は驚いたようだが、すぐに何かに納得し、同じタイミングでこう言われた。

『まあ…鍵（キー君）だもんな（ね）』

（またかよっ！）

最近なんか変な納得の仕方をされている気がする。

けど次からは何か聞かれたらこれを理由にすれば楽だな。

などと考えながら俺らはホテルに向かって歩き始めた。

〓〓〓視点〓

（あいつは何だったんだ？）

俺は試験の時偶然ヒステリアモードになっていた。

ヒステリアモードになるのは好きではないが、丁度試験のタイミングでなれるのであればなっておくに越したことはない。

その理由は、負けるはずがないからだ。

自分で言うのも何だが、俺がヒステリアモードになるととても強い。

中学の時はたしかヒステリアモードではSランクだったはずだ。

（それなのにあいつは……）

強かった。

圧倒的に。

俺の全力の攻撃を毎回ギリギリでかわされた。

まるで何かを探っているかの様にあえてギリギリでかわしていた。

それに俺の攻撃をかわした後には、必ず1番楽にかつ出来るだけ俺に怪我をさせないような方法を使ってきた。

恐らく……いや絶対に彼は一度も本気を出していなかったのである
う。

最後の連打も全然力を入れてなかったのが目に見えた。

（こんな化け物がゴロゴロといるのか東京武偵高は……）

ブルルッ

この季節に似合わない冷たい夜風のせいか、化け物に遭ったせいか体が震えた。

（明日の結果発表………大丈夫かな）

俺は布団に潜り込み、静かに眠りに落ちた。

第七話　く試験後の副会長く（後書き）

次回は2週間以内に頑張ります！

第八話　く結果発表の副会長く（前書き）

何故か完結になってますが、連載していますよ

感想よろしくお願いします！

第八話　く結果発表の副会長く

試験翌日の朝、俺達は試験結果を見に行くために武偵高に向かって
いる。

行く順番はじゃんけんで決め、最初にSSRでジャンヌの発表を見て
それから強襲科で俺と理子の結果を見ると言うことになった。

『SSR…はつと…』

ここか。

他の学科とは違い受験者数が足りないせいか、ここだけ人が少なく
スッキリとしている。

目の前まで歩いて行き、結果が貼られているボードに目を向けた。
すると上からこう書かれていた。

Sランク

星伽　白雪

レイフ・アルセイフ

Aランク

ノワール・クリプトン

椎名奏

東義成之

見城美嘉

ジャンヌ・ダルク

.....

『おー ジャンヌAランクだっ！ よかったね〜』

理子が自分のことかの様にはしゃいでいる。

『どうせならSランクがよかったな』

ジャンヌは胸を張ってそう言うが、顔は喜びに満ちていた。

『おめでとー！』

俺は心からそう言った。

『ありがとう』

ジャンヌは優しくそう返してくれた。

（これでジャンヌとは一緒に学園生活を送れるな。あとは……理子と俺か）

『ん〜 理子凄く気になってきた！ ねえねえ速く理子達のも見に行こうよ〜』

理子も速く結果を知りたいようだから行くとするか。

『じゃあ行くかー！』

理子を先頭に俺達は5分ほど歩いた先にある強襲科の結果を見に行
った。

『こっちはすごい混んでんや……てか受験者数以上に人がいない
か？』

こちらはSSRとは対照的に、物凄い数の人が集まっていた。

ざっと見積もって500人はいる。

受験者数は400人、結果発表は今日一日中なので、この時間に多
くて200人位しかないはずなんだが…

『本当に多いね。はあ』

理子はボードの数字が見える位置まで行くのが面倒なようであめ息
をついた。

『なんかみんなRランクとか言っているぞ』

Rランク！？たしか世界に数人しかないSランクをゆうに超えて
いる化け物みたいな奴らだ。

まさかそんな化け物がいたのか！

俺や理子が当たらなくて良かったな。

『Rランク……？ 何それ？』

理子はRランクの事を知らないようで、ジャンヌに尋ねた。

するとジャンヌは丁寧に解説を始める。

『Rランクとはロイヤルランクの略で、Sランクの更に上にあるランクだ。世界に7人しか存在せず、その実力はSランクが束になつても歯が立たないと言われている。』

『へえ〜』

理子はジャンヌの説明に納得したようだ。

それはともかく何で二人とも俺をガン見しているんだろうな。

うん、気のせい気のせい。

『フウ〜 じ…じゃあ前に行くか？』

俺は嘆息混じりに二人に問いかけた。

『うん』

『ああ』

俺達は人の洪水をなんとかくぐり抜け、ボードの前に立つ。

するとこう書いてあった。

Rランク

杉崎鍵

Sランク

中山智美

左西涼太

遠山キンジ

Aランク

間義友也

北大路里沙

峰理子

不知火亮

.....

『.....えっ?』

俺がRランク!?

『えっ...じゃないよ!』

『いや...だって俺.....がRランクだよ?』

『それは当然だろ? 何言ってるんだ?』

ジャンヌと理子はこの結果が当たり前かのように少しも驚いてなかった。

『もしかして驚いてないのって……俺だから?』

「うん！ キー君だからね」

やっぱりそうか……

で、理子はAランクか

なんとかこの話題から話を逸らすために理子に話を振った。

むつ

理子は真っ赤なほっぺを割れそうなほど膨らました。

「理子だって全力でやればSランクはいくもん！」

理子は本来、カドラ双剣双銃の理子だからな。

それならSランクは普通にいけるだろう。

『なんならSランクじゃなくて、Rランクくらい余裕だ〜っていうような気合いは無いのか?』

「いやっ 鍵それは…」

『いくらなんでもそんなのは無理だよ！ Rランクっていうのは異常な力を持つ公安零科や武装検事でさえ余裕に倒せる化け物みたいな奴になるランクなんでしょ！』

□ □ □
⋮
□
□
□

(俺は化け物化け物化け物化け物化け物化け物化け物化け物)

俺は全身の力が抜け落ちて地べたに四つん這いになり、心の中で何度もそう呟いた。

「キー君は違うよ！ 化け物なんかじゃないよ！」

「そうだぞ。鍵は化け物なんかではないっ」

「じゃあ俺はなんなんだ!？」

□ □ ··· □ □

先程までとは対称に場の空気は静まり返り、理子とジャンヌの口は接着剤で付けられたかのようにくっついたままだ。

しばらくすると、理子の口が徐々に開いてきてこう言った。

私の王子様？

（ズッキューン）

全く予想もしていなかったような言葉が理子の口から発せられ、元々致命傷を負った無防備な俺の心に直接響いた。

（我が人生に一寸の悔い無し。）

もう死んでいいや。

人生に諦めの着いた俺は、今度こそ全身の力が完全に抜け落ちて地べたに向かって倒れ込んだ。

『キー君！』

『鍵！』

なんか美しい声が聞こえたが、きっと天使の声であろう。

そのまま俺の意識は深海に沈んだ。

▼主人公設定（前書き）

何となく主人公設定書きました。

一応読んでいただけると話も解りやすくなると思います。

次回は12月中旬に投稿します。

明日からテスト一週間前で前回ひどい点数を取った作者は今回頑張らないといけませんのです。

▼主人公設定

名前：杉崎すぎざき 鍵けん

血液型：A型

顔：生徒会の杉崎鍵

性格：隠し事が苦手で、思った事を包み隠さず言ってしまうことがある。好きなものは好き、嫌いなものは嫌いとはハッキリした性格。原作を知っているので、ヒロイン達を助けようとしている。

武器：H & a m p ; K U C P (ドイツの自動式拳銃で装弾数は20発と一般のものよりも多い)を2丁と日本刀『紅』を1刀を使用する。拳銃は平賀文に改造してもらったため、実際は違う(作中で説明)。

二つ名：拳銃2丁と日本刀1刀を用いることから、単剣双銃の鍵(サドラの鍵)。また一部では、目に見えない速さで敵を倒していく様子から、不可視の怪物インヴァジビレモンスターと言われている。

ランク：強襲科、探偵科、狙撃科、諜報科(戦闘に関する学科)でRランク(8人目のRランク)

第九話　く出会つ副会長く（前書き）

久々に書いたんで、内容はあれですが我慢していただけると幸いです。

第九話　く出会っ副会長く

『カーカーカーカーカーカーカーカーカー』

何匹ものカラスが五月蠅く鳴いている。

（うるさいな）

目を開いてみると、窓を通り抜けてきた光が目以降り注いだ。

『んっ』

あまりにも明るかったので、俺は上半身だけを起こし、体を伸ばした。

というかここは何処だろう？

俺が寝ていたのはソファアの上だと気が付くのに数秒かった。

辺りを見回してみると、キッチンやテレビ、テーブルなどが有る至って普通の部屋だ。

『おゝ起きたか！』

後ろからどこかで聞いたことがあるような声がしたので振り向く。

そうすると、こちらの世界に来てから一度も忘れることの無かったあの男がカップを片手に立っていた。

『遠山……キンジ！？』

遠山キンジ——この緋弾のアリアの世界の主人公でSランク武偵、ヒステリアスサヴァンシンドロームHSSという性的興奮をすると通常時の数十倍もの力を発揮する遠山家特有の体質を持っている。

『おつ　俺の事知ってるのか？』

『まあ………というか何で遠山キンジがここにいるんだ？　てかここは何処？』

『はあ………えつとなんだどこから話すかな………』

そう言つてキンジは事の一部始終を話しはじめた。

『簡単に言つと俺のこれから住む寮の部屋がここで遠山キンジが俺の同居人ということだな？』

『そーゆーことだ』

遠山キンジが同居人か。

なんか面白くなりそうだな。

『じゃあ少し遅いが自己紹介な。俺は……』

話している途中でキンジが口を挟んできた。

『杉崎鍵、強襲科1年Rランクだろ』

『……そう。　てか何で知ってたんだ？』

理子やジャンヌが言ったのか？

『いや…多分今年の1年でお前を知らない奴はいないぞ』

『なんでだ？』

特に目立つことはしていないんだが…

『武偵高始まって以来の入学時にRランクに位置づけられた世界で8番目のRランク武偵だぞ！　注目されるに決まってるだろ』

Rランクってこの世界ではこんな認識なんだな。

『へっ』

『まあともかくよろしくなキンジ！』

『じゃあよろしくな。　えーっと……』

キンジがなんか戸惑っている。

恐らくなんで呼べばいいか悩んでいるのであろう。

『鍵でいいよ』

『おうよろしくな鍵』

そう言って握手を交わした。

『じゃあ行くぞ あつ制服はテーブルの上に置いてあるから。銃と剣はそのソファアの横な』

行く？

何処に？

入学式は4月7日、入学試験の2日後だ。

すると今日は試験の翌日、つまり入学式の前日だからそれはない。

『何処に？』

俺は思わず聞いてみた。

『入学式に決まってるだろ』

キンジはあたかも当たり前のことを言うような物言いだ。

しかしすぐにキンジは見た目は子供、頭脳は大人の少年名探偵が事件の真相を知ったときのような顔をして言った。

『あつ言い忘れたけど鍵、お前が寝ていたのは丸二日だ』

『速く言えよ！』

『ワリイ忘れてた』

キンジは片手を挙げてそう言った。

『ハアハアハア……ハア……ハア』

時間が無かったので、急いで学校に来てみると、先に出たはずのキンジをいつの間にか抜かしていた様で後ろから息を切らしてやって来た。

『キンジ遅いぞ！』

『おまえが速すぎんだよ！ 途中で車やバイクも抜かしていたぞ！』
そんなことが有ったような無かったような……

『大丈夫！ キンジも筋トレすればきつと出来るよ』

『出来ねえよ！ 五輪で世界記録出したボ○トさん、いやチータよりも速かったぞ！』

ボ○トさんになら勝てるかもしれないけど、せめて……カンガル……
……いやもつと早いな……ライオン……いや……

……

『せめてマグロくらいだ！』

『車よりも速えよ！ そんなんでき……んのは……お前……く……ら
いだ！……ハアハア……ハア……ハア』

キンジ……急いできて、ただでさえ疲れているのに、全てに突っ込んで来るとは……さすがキンジだ。

だが、俺はそんなじゃくじけないぞ。

『キンジも出来んだろ』

『ハア……んな……わけ……ハアハア……無……い……ハア……だろ……ハアハアハアハアハアハア』

じゃあここでとっておきの必殺技を使いますか。

『……HSSならな』

『お前なんでそれを知つ……………バタ……………ピクッ……ピクッ……………』

キンジは最期の一言を言い切り、人の行き交う校門で息を引き取った！？

第十話　く入学式の副会長く（前書き）

しばらく休んでたんでおまけです！

第十話　く入学式の副会長く

くキンジく

目を覚ますと俺はここにいた。

独特な薬っぽい匂いと、真っ白なベッドそして隣で寝ている鍵……
深いことを追求しなければここは保健室だ。

恐らく、いや絶対に鍵が倒れた俺をここまで運んでくれたのだろう。

それはともかくだ

何で鍵はHSSの事を知っているんだろう？

俺のHSSを知っているのは、本人である俺や兄さんといった遠山一族だけだ。

もちろん自分がHSSだなんて他人に言ったことは無い。

横浜武偵中の時は一部の女子に体質みたいなのを知られたことは有るが、それをHSSだと知っていた者はいないだろう。

兄さんに至っては、自分の体質を誰かに喋るなんてことは絶対にしない人だし……何より数年前に死んでいる。

となるとなんだ？

分からない。

『ん~~~~』

く鍵く

『ん~~~~』

どうやらキンジをここまで運んでそのまま寝て閉まったようだ。

当然ながら看病のために入学式はさぼった。

とうせ校長の坦々とした長ったるい話や教職員の紹介何かだろうから別に出なくても支障はない。

因みに結果発表の時トイレに行くふりをして、こっそり武偵校のコンピュータを操作たので、俺、キンジ、理子、ジャンヌ、そしておまけに不知火と武藤も同じクラスにしたからクラス発表なんて聞いても意味ないし。

因みに担任は蘭豹にしておいた。

弱みがあるし面白くなりそうだからな。

ってかキンジが起きているようだった。

『おはよう』

うん挨拶は大事だね。

『おはよう……鍵、おまえに聞きたいことが山ほど有るんだが』

ものすごく心当たりがある俺は必死にごまかす方法を模索した。

その果てに考えついたのが、

『あなたの最も知りたい事一つを相手の心情を考慮した上で、出来るだけ優しい言葉を用いて20字以内で述べよ。』

『おい鍵！ 助けてくれたのは有り難いがなんで隣で寝てるんだ！
トランクス一丁で！ そんなことよりも何で鍵がHSSの事を知っている！』

はい、62文字で字数オーバー。

完全にスルーされたことにショックを受けつつも答えた。

『キンジ！ 昨日の濃密な夜を忘れたのか！』

『…何でHSSを知っている』

二度目のスルーと冷静に言われるというダブルプレーは俺の想像していたよりも遥かに効いた。

『俺だから？』

『なんだよその理由は！ 真面目に答えろ！』

（あつれゝ理子やジャン又はこれで納得していたのにな？）

まあ普通自分が喋って無いんだったら、カナが言っただけで考えるよな。

『俺は情報収集も得意なんだ』

『強襲科でRランクの奴が情報科がやるような情報収集をそこまで出来る訳無いだろ！』

その後もしばらく俺に聞き続けていたキンジだが、頑なにごまかし続ける俺に諦めをつけて『入学式出て来る』と一言言っただけで保健室を出て行った。

一人しか居なくなつた保健室はついさっきまで言い合をしていたからかやたらと静寂が目立つ。

居心地の悪い雰囲気にならず、キンジが出てから少ししてから俺も保健室を出た。

廊下に出てみると入学式の最中ということがあつてか誰ひとりもいない。

無意識に時計をみると時間は10時50分、入学式が終わるのは11時なのであと十分程あるが今から行ってもとう世間に合わないの

で予め決めておいた自分の教室に向かった。

教室は驚くくらい見覚えがあった。

今は俺しかないなので広々としている教室だが、あと数分もすれば40人程帰ってきてこの教室は人に埋めつくされる。

そんなことを考えていると、教室に人がぞろぞろとやって来た。

もちろんその中には…

『キー君!』

『鍵!』

理子とジャン又は俺を心配してくれていたようだと分かった。

『心配かけて悪かったな』

先に理子達の所へ行くべきだったか。

『体はもう大丈夫か?』

『ああ全然大丈夫』

何日も寝ていたせいか、というよりも原因があれだったので別に体が悪い訳では無かった。

『なら良かった………キー君ってさ……以外にピュアだよね!』

『そうだな。いきなり付き合えとか言っただやと同じ奴とは思えないな。』

『いやっ! 俺はピュアじゃないぞ! 経験豊富な大人の男だし!』

『チラッ』

といって理子がスカートをめくり上げた。

すると中の蜂蜜色の薄い布地が自分を主張せんとばかりに堂々と姿を見せた。

一見丸みをおびている様に見えるが、それは理子の綺麗な足人形を合わせているからだろっ。

真ん中よりも少し上にある小さなリボンが、その布地にいいアクセントを加えていた。

『……………タラッ』

その布地をマジマジと見つめると口に何か暖かい物を感じた。

『うふふっ キー君はやっぱピュアピュアだね!』

するとジャンヌが普通にスーパーで売っているような物とは明らかにちがうティッシュをポケットから出してこう言った。

『鼻血でてるぞ』

口元を触ってみると、確かに生暖かい物を感じた。

そしてジャンヌは何かを思いついた様で、ティッシュをしまい顔を近づけてきた。

（まっまさかジャンヌ！）

それに応じようと俺も顔を近づけた。

しかしジャンヌは俺の口元に指を当てて顔の進行を阻む。

『鍵は動かなくてもいいんだぞ』

動かなくていい？

普通こっつうのは男からするものじゃないのか？

『あつれ〜 キー君は何をするって思ったのかな〜 ジャンヌはただキー君の血を止めるだけだよ』

理子の笑いを含んだ台詞の意味を理解でき無かったが、口元が急に冷えていくのを感じ、状況を把握した。

ジャンヌは血を氷らして止血をしてくれたのだ、

男はハンカチを取り出し、鼻孔以外の凍っている血を拭い取った。

しかしそれが終わると共に、辺りから殺気を感じた。

恐る恐る振り返ると、そこには多数の男子生徒、そして蘭豹が親の仇を見るような目で睨んでいた。

蘭豹はこめかみをピクピクさせつつも笑顔で言葉を発した。

『杉崎くお前今から殺すからそこ動くなよ』

蘭豹がこっちに向かって歩いてくると共に後ろにいた男子生徒諸君も続いてやってきた。

（これって…ピンチ？）

ここは蘭豹を止めれば後ろの奴らは止まるよな。

思い立った事はすぐにするタイプの俺は、その場にいる誰ひとりも感じる事が出来ないようなスピードで蘭豹の横にいき耳元で『らんらん』と呟くと、一瞬こちらを睨むもすぐに気を取り直した。

『じゃあお前ら席につけ！』

後ろにいた男子生徒達は、現状に戸惑いつつも直ぐさまに席に着いた。

そして俺も黒板にかかれていた窓際の窓際から三列目の一番後ろに座った。

因みに前がジャンヌ、右前がキンジ、右が理子である。

『まず今日のこのあとの予定は中高合同の身体測定だ。このクラスは11時30分からだからそれまでに着替えて校庭に集合。結果が

悪い奴には私からの罰ゲームだからな！」

最後の一言でやる気のだしたクラスメイトは、いつの間にか出しておいた体育着をもってぞろぞろと教室を出ていった。

俺は理子とジャンヌと一緒に教室を出た。

第十話　く入学式の副会長く（後書き）

次回は20日くらいだと思います。

第十一話 くやっぱりすこい副会長（前書き）

半分寝ながら書いていたんで、誤字脱字が有るかもしれません。

先に謝ってきます！

第十一話 くやっぱりすごい副会長

男子更衣室で着替えて校庭に出てみると、何百人もの生徒が同じ服を着て集まっていた。

それでも校庭が広く感じるのは敷地が広いからであろう。

これでも中等部と高等部のC組だけだというのだからすごい。

『おいキンジ！』

『……………おう』

先程の事があってかキンジは微妙にブルーのようだ。

その後もしばらく一緒に歩いていくも何も話すことは無く、そのまま時間は流れていった。

午前中の数時間は身長、体重などいたって普通の身体測定だったが、午後は違う。

『おい2・Cの探偵科以外の奴ら！こっちで探偵科の試験すつぞ！』

武偵校での身体測定は普通の身体測定ではない。

身長、体重などの他にも自分の所属する学科以外の試験もするのだ。学校が言うことには、ごくごく稀に所属する学科以外で凄い才能を発揮する人が数年に一人くらいいることがあるから。

それと武偵として総合的にどれ程の能力があるのかを教員達が把握するため。

つまり、武偵の総合技量試験ということだ。

というわけで俺は試験をする場所に移動した。

『おーし皆集まったな』

試験会場は強襲科の試験をやった場所になんとなく似ている建物のようだ。

『じゃあルールをせつめいすんぞ』

そのあと流れて来たルールはこうだ。

俺達が全員入り次第この建物を完全に封鎖する。

そこから脱出しろということらしい。

また、この建物の中にあるカードを一枚もって来なければならない。

カードは丁度人数分ある。

怪我をさせずに続行不可にした人数も評価の対象である。
リタイア

一般的に考えれば、完璧な結果はこの中にいる全員の身動きを取れなくすることとなる。

『よしっ！全員この中に入れ！』

教員の掛け声とともに俺は建物に入った。

中に入ってみるとやはり強襲科の試験会場に似ていた。

しばらくして全員が入った様で入口の鍵が閉まる音が聞こえる。

つまり、試験が始まったらしい。

この建物は至って普通だった。

しかし、二カ所だけ不自然な所があった。

一つ目は、外見からして思った事だが、1階が他の階と比べて1センチ程長いのだ。

二つ目は、中に入ってみて気付いた事だが2階と3階の間の階段の4段目5段目の間、16段目17段目の間がそれぞれ5ミリずつ大きい。

つまりそこには必ず何かしらがあるということだ。

だが、今の状況でそこを探ったりなんかしたら確実にまずい。

俺の回りには同じクラスの奴らが30名程がいる。

皆相手の出方を待っているという様子だ。

勿論のこと、その中には理子やジャンヌそして何故かHSSモードのキンジがいた。

仮に俺がそこで何かを見つけてしまえば、確実に皆はそこに向かうだろう。

それで何かを奪われたとして、俺が奪い返せる確率は100%。

だがそれは少しでも怪我をされることが許容されるならばの話。

加減すれば奇跡的にキンジ位は逃がしてしまうかもしれない。

かと言って普通にやれば、痣くらいは残ってしまうだろう。

すると残る選択肢は一つだ。

俺は直ぐさまにその考えを行動に移した。

まず入る前に試験官に配布された縄を伸ばす。

無論それには一秒も掛からなかった。

『カサツ…』

そして俺が床をふみこんで発せられた布を擦り合わせた様な音と同時に全てが終わった。

順を追って説明すると、まずそのロープで一番近くにいる理子の手足を縛る。

そして理子が持っていたロープを取り、その隣にいる奴の手足を縛る。

要はその繰り返しだ。

それにキンジは一瞬反応出来たみたいだが、そのときは既に事を終えた後だった。

『おい……鍵？』

ジャンヌが手足を縛られ横になった状態で不思議そうな顔をして聞いている。

『何だ？』

『この縄は？』

『あゝそうしたらお前達は続行不可になるだろうと思ってな』

そういつつ俺は階段に向かった。

『キー君！理子がいればカードの場所が解るよ！だから理子を解いた方がお得だよ！』

と理子が上目遣いで言ってきた。

普段ならこんな攻撃に耐えるのは不可能だっただろう。

しかし今は試験だ。

いい結果を残せばより多くの依頼を受けられる。

すると単位がどんどん貯まる。

結果的に授業をサボっても大丈夫になり、理子やジャンヌやこれから出会っていくであろう女の子達を守りやすくなる。

これは理子の為でもあるんだ。

（ごめん！）

心でそう呟き二階へ向かった。

案の定階段の隙間にはカードがびっしりと詰められていた。

それを全て持ち、一階に戻る。

一階に戻ると色々と話かけられたが、それを『俺だから（笑）』と笑顔で返して、入口へ向かった。

扉を試しに開けようとしたが勿論扉は開かない。

俺は扉から5メートル程右に向かった。

その壁だけがほんの少しだけだが、新しくとって付けた様に思えたからだ。

近づいて見てみると、その壁には薄く斜めに線がはいっていた。

その壁を線に沿って斜めにずらす。

するといとも簡単に壁に大きな穴が空いた。

『他は……やっぱりお前だけか』

目の前にいた試験官が中を見回しそう言った。

その後、他の学科の試験も一通りこなして武偵校初めての日は終わった。

第十一話 くやっぱりすごい副会長く（後書き）

今年はこれにて終了！

だいぶ速いですが、今年はありがとうございました！

来年も引き続きよろしく願います（く、ぐ）

来年初の投稿は大体5日位になると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5094x/>

とある副会長の転生物語 ～ 緋弾のアリア編～

2011年12月20日20時52分発行